

Title	<書評>富岡次郎著 『ゼネストの研究』
Author(s)	大前, 真
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1979), 62(3): 483-487
Issue Date	1979-05-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_62_483
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

——つまり民族工業は競争に敗北して没落するというものであったが、この方法はそもそも新しい条件の生成を捨象するものではないであらうか。

たしかに三〇年代に新しさを認めようとする諸研究は、著者が三つの異説として整理されているように、一つの体系として完成されたものとはなっていない。しかしながら、そこに何か現代にすらなる新しい変化がおこったことをみとめないわけにはいかないうの、そのような研究の段階がやってきつつあるのではないか、というのが本書を読みながら感じた卒直な印象である。

私の誤解・読みこみすぎによる非礼な箇所があるかもしれない。著者の御寛恕をお願いする次第である。

(A5判 本文三三四頁 一九七八年六月 ミネルヴァ書房 二六〇〇円)

(静岡大学教育学部講師)

富岡次郎著

『ゼネストの研究』

大 前 真

一九二六年五月四日、TUC総評議会は、傘下諸組合に炭鉱労働者を支援するための同情ストライキを指令した。ここに九日間 にわたるゼネラル・ストライキの幕が切って落とされた。

争点は、炭鉱労働条件である。第一次大戦中、戦時生産体制のエネルギー供給源として活況を呈したのだが、炭坑夫たちは、これを利して坑内七時間労働および全国一律労働条件交渉権を獲得することができた。しかし、戦前からの、イギリスの基軸産業としての石炭産業の地位は、戦後不況の中で掘り崩される。それと同時に、石炭労働問題は、二十年代をとおして労資対立の中心となるが、その一つの帰結が二六年ゼネストであった。

炭鉱経営者側のロック・アウトに端を発したのだが、経営者側は労働時間の延長と地域別賃金交渉を要求し、坑夫側は既存労働条件の維持のため徹底抗戦の構えをみせた。この争いがゼネストへ発展する。

このストライキは、イギリス労働運動史上、特異な事件である。第一に、穏健な労使協調路線に従ってきたTUC中央は、それ以前にも以後にも、下部組織の提起したストライキを公認また非認したことはあるが、自らストライキ指令を発したことは一度もな

い。二六年ゼネストは唯一の例外である。

第二に、職業別組合の伝統の上に発展してきた諸組合は、お互いに個別の利害を主張することに熱心で、階級的利害の観点から共闘することはまれであった。このような地盤の上で、いかにしてゼネストが可能であったのか。

第三に、TUC指導部のあいまいな闘争方針、突然のゼネスト終結宣言は、当時「裏切り」とさえ評価を受け、参加した労働者の多くに経営側の報復を甘受させたのであったが、それにもかかわらず、同年のTUC年次大会で、アーネスト・ペヴィン、ウォルター・シトラインら、その後もTUCを指導しつづけた人々を含む総評議会が信任を受けたことは、何を意味するのか。そのことは、ゼネストがイギリス労働運動の方向をどのように変化させたのか、また、させなかったのかという間にもつながるであろう。

五十周年にあたる一九七六年前後に、イギリスの歴史研究者たちの中から、何冊かのゼネスト研究書が現れたのは、イギリス現代史上、最大の事件の一つを記念すると同時に、その後半世紀にわたる運動の展開を見ることのできる今日の目から、この事件を再検討し、ゼネストの謎を解こうとする試みであったにちがいない。

さて、ここでとりあげる富岡次郎氏著『ゼネストの研究』は、イギリスでの研究成果に注目された著者が、日本における、この事件についての本格的研究の不在を埋めるため、また、ゼネストをめぐるさまざまな問題を説明するため企図された労作である。おそらく、日本におけるイギリス労働運動研究史上、一つの事件についてこれほどのページ数をもつ書物が刊行されたことはない。

であろう。著者の学問的野心のほどがうかがえる。

以下、章建てにそって、内容の紹介と批評を進めることにする。第一章「赤い金曜日」、第二章「ゼネストへの道」では、TUC指導部および労働党は、資本および政府との全面対決を避けることに努力し、それに対して炭鉱労働組合とようやくその中に勢力をのばしはじめた共産党のゼネストに備えよとの主張の対立、ゼネスト前夜の労働戦線配置が叙述される。

第三章「国家権力の対応」では、分裂する労働戦線とは対照的に、政府は二六年五月に訪ずれるであろう一大決戦に備え、非常事態機構を整え、民間にはヴォランタリー組織として必需品供給維持組織が発足し、共産党を指導者の逮捕によって弾圧し、万全の手を打ったことが示めされる。

著者はこの三章で、ゼネストにいたる過程をたんねんに追われたのであり、読者は、ここで労働者側のゼネスト敗北の必然を印象づけられるのである。しかし記述が事件の経緯にかたよすぎたためか、それぞれの陣営がそれぞれの戦略を採用するにいたった経過とその社会的・経済的背景についてほとんどふれられていないため、読者はあらかじめ戦力配置のでき上ったゼネストの戦場に、いきなり立たされてしまう。そこで考えることは、なにゆえにこの一大決戦は闘われねばならないのかということである。

TUC指導部は、下部と共産党のつきあげ、政府および資本家の挑発によって「しぶしぶ」ゼネストの指令を発することをしいられたのだとの説明も、それならばどうして政府はこれほど決戦を望み、強硬な態度に出たのかとの新たな疑問を呼び起こすのみである。本書をとおしてゼネストの場に立ち合わねばならない読者

は、この一大決戦の歴史的意味の解明を要求する権利があると思うのだがどうであろうか。先まわりして言えば、本書を通読したのちもこの不満は解消せずに残ってしまうのである。

第四章は「ゼネスト突入とその範囲」である。ここでは、TUC指導部がほとんど準備もなしに発したストライキ指令に答えて傘下諸組合の中央と地方支部のイニシアティブの下、全国的ストライキが開始されたことがのべられる。くりかえすが、歴史を誇るイギリス労働運動において、このような全国的かつ大衆的戦闘性が発揮されたことは、空前絶後である。ここでも、一九二一年の「暗い金曜日」における三角同盟の瓦解について考えるとき、いかにしてこの大争議が可能であったのかという評者の疑問は解かれずに残る。

第五章「諸組織の協力」では、協同組合、共産党、コミンテルンとアムステルダム・インターのゼネストへの対応が分析される。著者は、協同組合について、ストライキにおいて労働組合の兵たん部であるべきであるとの観点から、両者の共闘が不在であったことを、「TUCのゼネスト戦術における最大の欠陥であった」と指摘される。また、少数でありながらも不転の決意をもって闘争にとり組んだ共産党およびコミンテルン、プロフィンテルンの主張した統一戦線も、TUCの、ゼネストを経済闘争に極限しようとする右翼的指導方針によって拒否されたことがのべられる。本書の重要なテーマの一つであるイギリス共産党のゼネストにおける活躍は、これまで日本の研究史では、かえりみられることのない点であり、かねてよりイギリス共産主義運動に興味を示しつつづけてこられた著者の問題意識の一端がうかがわれて興味

深い。

第六章「ゼネストとマスコミ」は、情報戦をとりあつかう。ここではTUCの劣勢はおおむねよくない。とくに、新兵器としてのラジオの出現、BBCという官営放送局の存在が、政府の情報戦における勝利を決定づけたとの論点は斬新で、イギリスにおいて、電波によるマス・コミュニケーションが大きな意味をもった最初の事件であったことを知らされた。

第七章「地方における闘争」は、おそらく著者が最も力を入れた章にちがいない。九十ページがあてられている。短い書評のわくのなかでは、内容を紹介する余裕はないが、イングランド、ウェールズ、スコットランドにおけるゼネストの実態を、地域ごとに詳しく叙述されている。これまでの研究史がゼネストを中央レベルで、それも不十分にしかとらえてこなかったことを考えるとき、貴重な研究成果である。

惜しむらくは、地域別の闘争を叙述することにとどまっているため、本書全体の三分の一を費やされたことに関する著者の意図があいまいなものとなってしまっている。

第八章「ゼネスト終結と余波」において、読者はTUC指導部の無惨な裏切りを印象づけられる。兵士たちの意気ますます盛んになりつつある、まさにそのとき、突如として敗北宣言が参謀本部たる総評議会によってなされたのである。ゼネストに参加した戦闘的労働者は屈辱的結末を迎えたといえる。TUC総評議会が敗戦処理を放棄したため、各組合は苦汁をなめさせられる。

執行部不信は極度に高まったはずだが、しかし、このことと同年のTUC定期大会において、総評議会活動報告が左派の鋭い追

求にもかかわらず、承認を得たこととの矛盾こそ説き明されねばならない。「むすび」に目をとおし、著者が次々とTUCゼネスト戦術の誤りを指摘されるのを讀むとき、この疑問は深まるばかりである。ゼネストの余波として著者がとりあげられたモンド・ターナー会議とそれにつづくTUCの経済闘争を主軸とする指導方針の「右傾化」は、ゼネスト指導者、ベヴィン、シトラインらによって進められるのだから、この点の解明は不可欠であると考えるが、どうであろう。

「むすび」は、先にもふれたように、主としてTUCの不徹底な指導方針に対する批判にあてられている。

著者の見解は明確であり、ゼネラル・ストライキが、政治的目標を射程に入れないかぎり、しいては、政治革命をも展望しないかぎり、不成功に終わるのであるとの指摘は、当時も今も不変の真理であろう。

ただ、ここでも疑義を差しはさむとすれば、TUCは炭鉱労働者の闘争を支援するというスローガンによってはじめて、すなわち、純経済的目的をかかげたからこそ、あれほど多くの労働組合員を動員しえたのではないだろうか。TUC指導部は総評議会には政治的闘争を組む権限も力量もなかったし、そのような方針を採用することは、おそらく総評議会を窮地に追い込んだであろう。それゆえ、TUC指導部は、けっして二六年のストライキをゼネストと呼ばず、全国的情緒ストと称して政治色を排除しようとするのであり、一方、政府は労働組合をボルシェヴィキとして非難しつつ総評議会に圧力をかけながら、愛国的勢力の動員に成功したのである。著者の戦略的批判は俗にいう「ない物ねだり」に

なりかねない。

最後に、この図式、すなわち、革命の意志をもたず、それどころか、自己の提起したゼネストが革命的状况へ発展することを恐れつづけたTUC総評議会と、一貫して国家の危機、ボルシェヴィキの脅威を訴えつづけた政府という図式から、勝敗の帰す方を明らかに読みとることができるとは、しかし、ひるがえってみれば、果たして政府はゼネストに勝利したのであったか。自ら挑発してまで戦闘を開始した政府は、炭鉱問題を解決しえたであろうか。事實は、ゼネストによって海外市場を喪失したイギリス石炭業は大打撃を受けることになる。

有名なエピソードに、チャーチルがシトラインに対し、政府にとってさえ、ゼネストは何の利益もたらさなかったし、財政的にみるならば、石炭産業への補助金支給の方がプラスであつたろうと述べたという。

一方、TUCおよび労働党の指導部にとって、ゼネストに敗北したことは、かえって自らの経済主義的指導方針の正しさを証明したこととなつたし、ベヴィンとシトラインらがひき続き指導的地位を占めつづけた総評議会の運動内における権威は、高まりこそすれ、失われることはなかった。また、労働党は政府に対する反発とTUCによる経済闘争の限界の自覚からくる民衆の政治的エネルギーを吸収して、一九二九年総選挙に思いがけなくも勝利することとなる。

ゼネストにおける敗北とそれの生み出したものとの間には、説明すべき問題は多いのであるが、本書の「むすび」はゼネストの直接的帰結に簡単にふれるのみに終わっていることに、評者は不

満を感じる。

以上、かねてから評者自身が一九二六年ゼネラル・ストライキについてもってきた問題関心に則して批評を試みた。日頃、著者に接し、その学識の深さに触発されつつづけてきた評者は、いつもながら著者の緻密さと精力に感嘆しながら、本書に閲しここに提出したいいくつかの疑問に答えて下さるであろう著者の続稿を期待し、また、おそらく以後のゼネスト研究は本書を無視してありえないことをも付言して、書評の責を終えたいと思う。

(A5判 本文三〇四頁 一九七八年十月 三一書房 四五〇〇円)

(京都大学人文科学研究所助手